



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第109回 高校生のネット依存の国際比較

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■ 東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年) 等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



#### 世界に広がる高校生のネット依存?

3年ごとに実施されているOECD（経済協力開発機構）のPISA（学習到達度）調査は、世界各国の15歳の生徒を対象にした国際的な学力調査であり、その結果には世界的な関心が集まる。同調査では、学力テストに合わせて、就学上の状況調査として、生徒の意識や生活について直接生徒から聞く調査を実施している。

今回は、この中から「ネット利用」についての結果を見てみよう。わが国では、スマホやインターネットについてはマイナス面がプラス面に比して報じられることが少ないと印象をもっているのは私だけだろうか。ところが国際的には子どもへの影響を中心にネット中毒が大いに心配されている。

世界保健機関（WHO）が昨年5月に、オンラインゲームなどにのめり込み、生活や健康に深刻な影響が出た状態を「ゲーム障害」（ゲーム依存症）と呼び、精神疾患と位置付ける「国際疾病分類」を正式決定したのもそのためである。

まず、世界の高校生がどの程度、SNSやオンラインゲームなどネット利用にのめり込んでいる

かを見てみよう（図1）。

OECD諸国の平均で、2018年に高校1年生がネットを使用している時間は、学校外、すなわち家庭で週27.0時間であり、1日当たりに換算すると3.9時間に及んでいる。

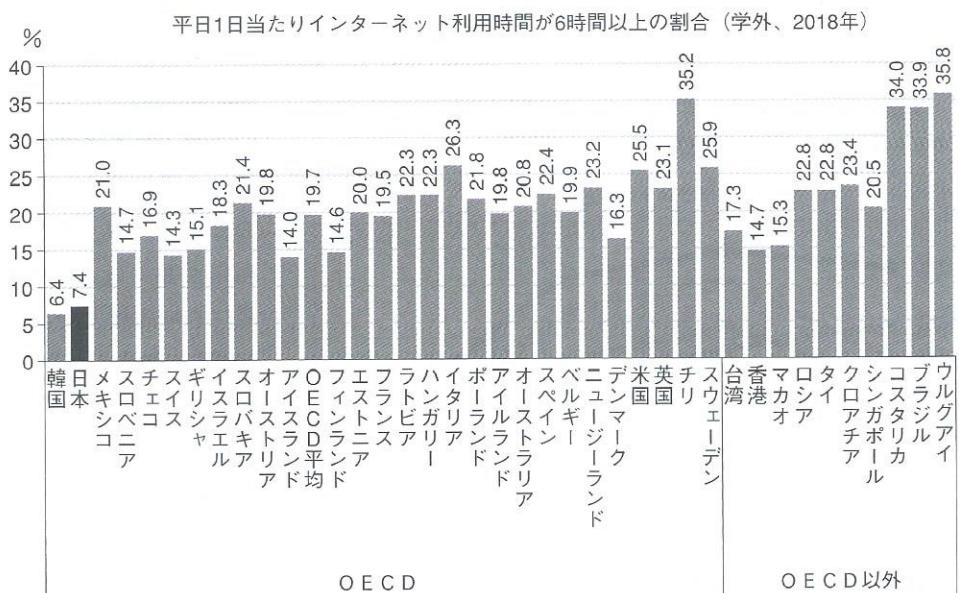
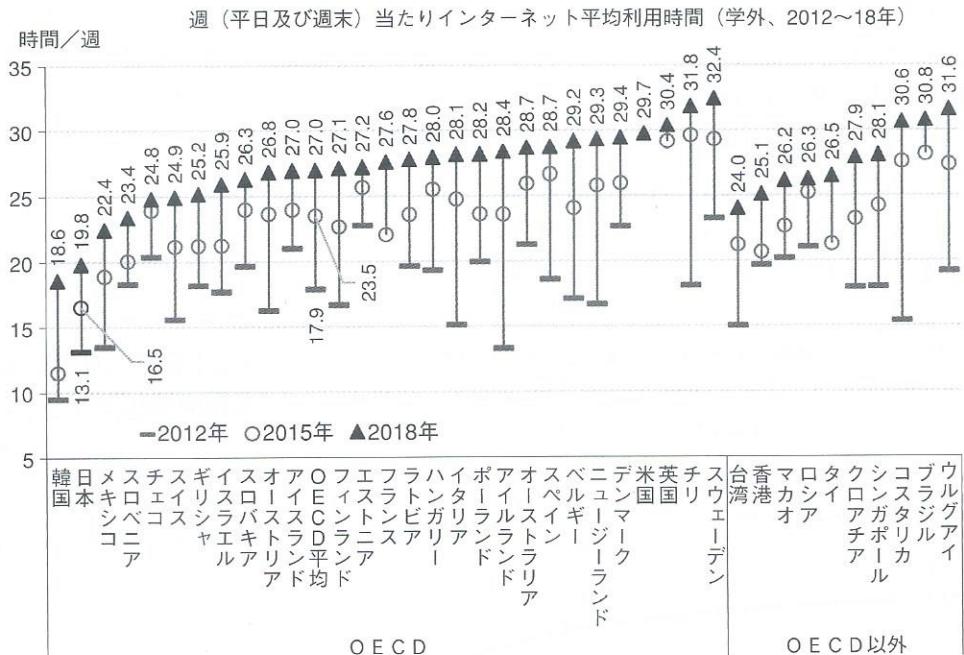
OECD諸国では英国、チリ、スウェーデン、OECD以外ではコスタリカ、ブラジル、ウルグアイでは週30時間を超えている。

ネット利用時間は大きく伸びてきており、2012年、2015年のOECD平均は、それぞれ、17.9時間、23.5時間であり、2012年から18年にかけては51%の増加となっている。各国の動きを見ても、ほとんどの国でこの間に大きく高校生のネット利用時間が伸びていることが分かる。

PISA調査の報告書ではネット利用時間を何段階かに分けて分析しているが、本稿では平日学外6時間以上を「ネット依存」（中毒）とみなすこととする。

2018年の調査でネット依存の高校生の比率はOECD諸国平均で19.7%であり、調査対象国の中で最もこの比率が高いのはウルグアイの

図1 高校生のネット中毒は全世界的（PISA調査）



注) 15歳が対象。インターネット利用には携帯電話を含む。国と並びは2018年の週当たり平均利用時間の少ない順。英国はスコットランドを除く。週当たりの時間はOECD資料、6時間以上の割合は国立教育政策研究所資料による。

資料) PISA 2018 Results (Volume III) Annex B1.11. 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査(PISA)～2018年調査補足資料～生徒の学校・学校外におけるICT利用」

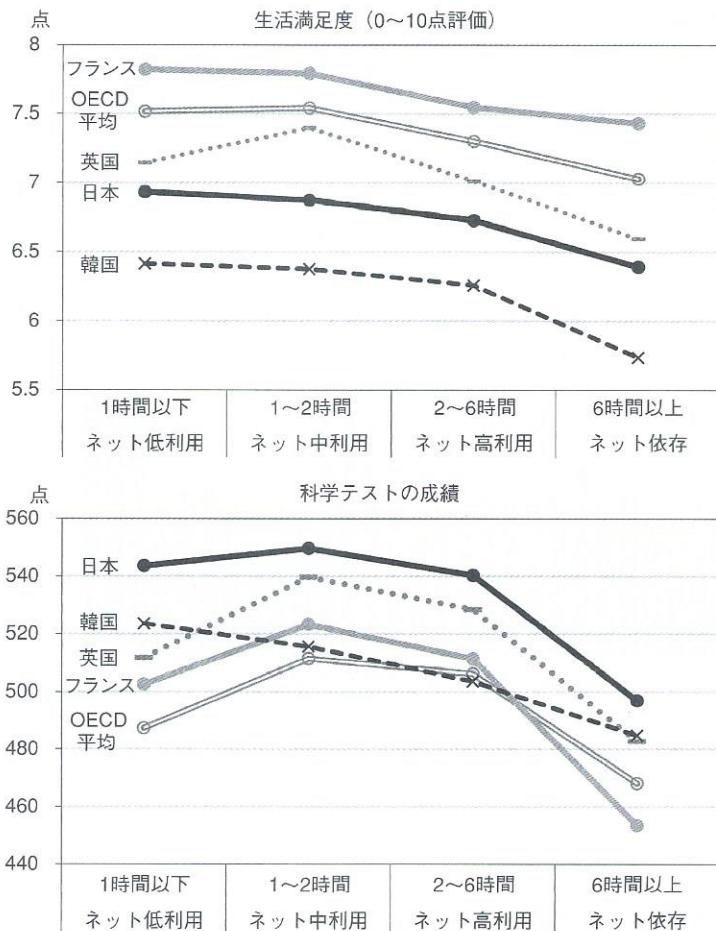
35.8%であり、チリの35.2%がこれに続いている。OECD諸国の中では、チリに次いで、イタリアの26.3%、スウェーデンの25.9%、米国の25.5%が高かった。

地域的には先進国、途上国を問わずネット依存が全世界的に広がっている様子がうかがえる。

日本はこの値が7.4%と低く、韓国や台湾、香港、マカオなどと並んでネット依存の程度が世界の中では低い点が目立っている。韓国や中国人地

域は、一般の社会では、日本とは異なり、世界の中でもネット化が進んでいることで有名であるのに、高校生の世界はまた別なのである。これは、これらの地域では儒教の影響下で紙に書かれた文書と比較してネット情報が一段低いものと評価されているからであろう。また、ネットばかりしていてはダメという先生や親の言うことに比較的こうした国の人間は従う癖がついているためでもあろう。

図2 ネット依存の生徒は生活に満足しておらず学力も低い  
(主要4カ国とOECD平均)



注) 15歳が対象。ネット(インターネット)利用時間は携帯電話を含む平日1日当たりの値。  
ここでは原資料の“Extreme Internet users”を「ネット依存」と訳した。

資料) PISA 2015 Results (VOLUME III) STUDENTS' WELL-BEING

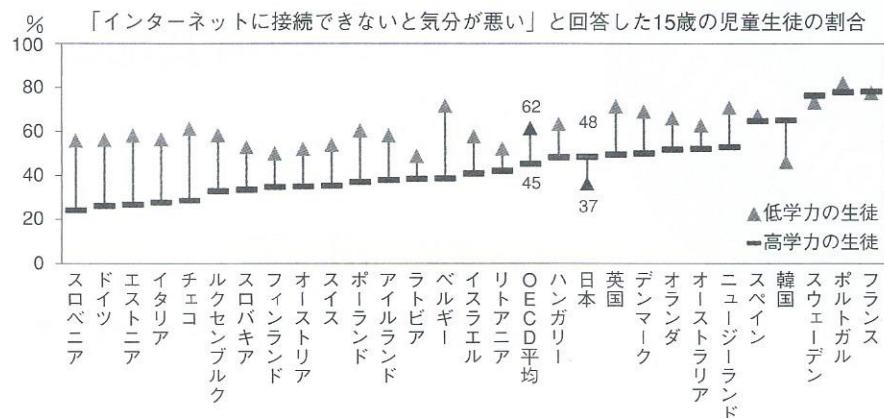
### ネット依存の問題: 低い生活満足度や低学力と結びつく

ネット依存は何が問題なのであらうか。この点を探るため、2015年のPISA調査結果であるが、ネット利用時間(平日1日当たり)と生活満足度および学力との関係を示すデータを図2に掲げた。

生活満足度は、おおむねネット利用時間が増えると低下する傾向が認められる。科学テストの成績で見ると学力はネット利用1時間以下よりは1~2時間の方が高いが、それよりネット利用が長くなると成績は落ち、特に6時間以上ではぐっと落ちる傾向が認められる。

幸せでないからネットに走るのか、それともネット依存が不幸を招くのか。また、学力が低いからネットに走るのか、それともネット依存が低学力を招くのか、については、さらに突っ込んだ検討が必要であろう。私には両面があるようと思える。

図3 できない生徒ほどインターネットに接続できないと気分を悪くする(OECD諸国、2015年)



注) PISA 調査による。読解、数学、科学のテストの結果が1～2 レベルが低学力、5～6 レベルが高学力。

資料) OECD Skills Outlook 2019, p.159

## ネット依存の弊害に自覚的になることが重要だ

デジタル社会における人間能力の開発を扱った別のOECD報告書でも、ネット利用がメンタルヘルスを害しているかもしれないという問題が大きく取り上げられており、これまでふれてきたPISA調査の結果が参照されている。そこでは、さらにPISA調査のネット関連の別の設問の結果を引用して(図3参照)、問題を克服するためにはネット依存の弊害に自覚的になることが重要だと指摘している。その部分を引用しよう。

「勉強のできる生徒は技術の極端利用(技術への依存)と結びついているリスクをよく知っており、コンピュータにどれだけの時間を費やすか、またいかにデジタル機器を使うかについてより自覚的である。PISA調査のデータによれば高学力の生徒はインターネットの接続が切れても気分を害すことが少ないのである。インターネットがつながらずに気分が悪くなる生徒の割合は、読解力、数学及び科学のテストで低学力の生徒では62%であるのに対して高学力の生徒は45%と少なくなっている」(OECD Skills Outlook 2019, p.158)。

なお、引用の通りの一般傾向とは反対に、日本と韓国だけは高学力の生徒の方がネット不接続にイラつきやすくなっている。理由は不明である。

## 何らかのネット依存対策の必要性

以上のように青少年を取り巻くネット利用の状況はかなり深刻化しているので、何らかの依存対策が必要である。ネット利用も依存症に陥りやすいという点ではアルコールやたばこと同じである。アルコールやたばこは未成年には禁じられており、特別の税が課せられてもいるのに、ネット利用は、なぜ、野放しになっているのであろうか。

他国の対策も参照しながら、青少年向けの具体的なネット依存対策、例えば、①青少年へのネットの長時間使用の禁止、②広告規制(青少年を煽るような広告の禁止。弊害の併記義務化)、③スマホ税を原資とした疫学的研究の促進、および病気としての認知、④学校における啓発活動の普及、などを検討すべきではなかろうか。

対策を考えるにあたっては、図1の分析でふれたように日本や韓国など儒教圏諸国では高校生のネット依存の程度が格段に低い点なども大いに参考になるはずである。